

## 口頭表出活動においてリハーサルと練習が学習者の発話に及ぼす影響

藤田 卓郎  
(福井工業高等専門学校 非常勤講師)

第38回中部地区英語教育学会 長野大会  
6月28日(土) 於 清泉女学院大学・短期大学

## はじめに

### 本研究の目的

- ペアを代えて同じ活動を繰り返し行う活動
- 学習者の発話のどのような側面にどのような影響を及ぼすのか。
- 練習とリハーサルに分けて調査
  - リハーサル：同じ活動を1度だけ繰り返す
  - 練習：同じ活動を2度以上繰り返す

## 先行研究：リハーサルの影響

**Bygate (2001)** :Speaking → Speaking  
(同じモードのリハーサル)

- 流暢さ (n.s.)、統語的複雑さ (+)、正確さ (n.s.)  
(ナレーションタスク)
- 流暢さ (-)、統語的複雑さ (+)、正確さ (n.s.)  
(インタビュータスク)

**伊達(2007)** : Writing → Speaking (モードの異なるリハーサル)

- 流暢さ (+)、統語的複雑さ、語彙的複雑さ、正確さ (n.s.)

## 先行研究：練習の影響

• **Lynch and Maclean (2000)** : 習熟度の異なる学習者の発話の分析

- Alicia (low-level)
  - 語-動詞の語順の正確さの向上  
→ 33%→29%→71%→33%→80%→ 80%と変化
  - 他の学習者からのインプットを利用
- Daniela (high-level)
  - 複雑な概念の説明の精緻化…Q-TWISTという統計手法の説明  
→ 60words→108words→231words
  - 発音への注意分配…dataの発音を意識的に直そうと心がけていた。

• **Gass, Mackey and Fernandez-Garcia(1999)** :  
• 同じ内容の練習vs異なる内容の練習

同じ内容の練習 > 異なった内容の練習 (スペイン語eserの使用の正確さ)  
\*統計処理なし

## 先行研究：練習の影響

**Bygate (2001)** : 同じ種類のタスクの練習

- 流暢さ (n.s.)、統語的複雑さ (n.s.)、正確さ(n.s)
- 同じモードの練習を行っても学習者の言語運用能力は向上しなかった

**伊達(2007)**…ライティングのリハーサルを伴ったスピーキング活動の練習

- 統語的複雑さ(+) (low-level learners)

## 研究課題

研究課題1：リハーサルの影響

1回の授業内で同じ活動を2回行った場合、学習者の発話の生産性、流暢さ、複雑さ、正確さはどのように変化するのか。

研究課題2：練習の影響

1回の授業内で同じ活動を5回繰り返し行った場合、学習者の発話の生産性、流暢さ、複雑さ、正確さはどのように変化するのか。

研究課題2：練習による学習者の発話の質的な変化

同じ活動を繰り返すことで、学習者の発話の質的な側面はどのように変化するのか。

### 方法①：実験参加者とタスク

<実験参加者>

- 高等専門学校1年生 (N = 10)
- 男子7名 女子3名
- 英検3級5名 4級1名 → 初級学習者
- Communication I の授業中に実施

<タスク>

- Show and Tell
- ⇒ 紹介したいものの絵を描き、その絵について発表するタスク

### 方法②：トリートメント

- 辞書等外的リソース使用不可
- 絵を描くために時間を使用
- 1回の発話に1分30秒
- ペアを代えて5回連続で発話
- 5回連続で同じ学習者が発話

### 方法③：分析方法

リハーサル → Task 1 vs. Task 2  
練習 → Task 1 vs. Task 5

表1：分析方法

生産性	発話時間 (秒) 発話語数 (reformulation, repetition, filler等除く)
流暢さ	1分間あたりの発話語数：発話語数 / 発話時間(秒) × 60
統語的複雑さ	総節数 / AS-unit数 総語数 / AS-unit数
語彙的複雑さ	Type-Token Ratio：異なり語数 / 総語数
正確さ	誤りのない節の割合(%)： 誤りのない節 数/ 総節×100

### 方法④：統計手法

効果量 (effect size)

- 平均の差がどの程度の違いなのかを調べる方法 (小泉&片桐, 2006)
- サンプルサイズの影響を受けない

GlassのΔを使用…被験者内比較時で用いられる効果量測定法 (Kline, 2004)

$$\Delta = |(\text{Mean 2} - \text{Mean 1})| / |SD 1|$$

- 効果量 なし  $0 \leq \Delta < 0.2$
- 効果量 小  $0.2 \leq \Delta < 0.5$
- 効果量 中  $0.5 \leq \Delta < 0.8$
- 効果量 大  $0.8 \leq \Delta$

### 結果1：リハーサルの影響(発話1 vs. 発話2)

表2 記述統計と効果量：リハーサル

変数	Mean1	SD 1	Mean 2	SD 2	Δ
発話時間	59.19	21.92	61.68	20.58	0.113
発話語数	38.3	9.8	42.5	12.24	0.428*
流暢さ	46.43	24.12	47.65	24.55	0.050
節数 / AS-Unit 数	1.05	0.10	1.09	0.10	0.400*
語数 / AS-Unit 数	4.67	0.77	4.85	0.84	0.233*
語彙的複雑さ	0.74	0.07	0.69	0.07	0.714**
正確さ	76.65	13.82	74.87	13.65	0.128

### 結果2：練習の影響(発話1 vs. 発話5)

表3 記述統計と効果量：練習

変数	Mean1	SD 1	Mean 5	SD 5	Δ
発話時間	59.19	21.92	55.82	19.15	0.153
発話語数	38.3	9.8	46.4	9.07	0.826***
流暢さ	46.43	24.12	56.72	26.57	0.426*
節数 / AS-Unit 数	1.05	0.10	1.12	0.13	0.700**
語数 / AS-Unit 数	4.67	0.77	5.17	0.79	0.649**
語彙的複雑さ	0.74	0.07	0.68	0.04	0.857***
正確さ	76.65	13.82	75.38	20.94	0.091

## 結果3：リハーサルと練習の影響の比較

表4 結果のまとめ

	生産性		流暢さ	統語的複雑さ		語彙的複雑さ	正確さ
	発話時間	発話語数		節数 / AS-unit数	語数 / AS-unit数		
リハーサル		+		+	+	--	
練習		+++	+	++	++	---	

Note:

+= M1 < M2(M5), 効果量小, +++= M1 < M2(M5), 効果量中,  
 ++++= M1 < M2(M5), 効果量大, ---= M1 > M2(M5), 効果量中

## 結果4：先行研究との比較

表5 先行研究との比較

	生産性		流暢さ	統語的複雑さ		語彙的複雑さ	正確さ
	発話時間	発話語数		節数 / AS-unit数	語数 / AS-unit数		
リハーサル							
伊達(2007)			+				
Bygate (2001)					+		
本研究		+			+	-	
練習							
伊達(2007)				+			
Bygate (2001)							
本研究		+	+	+	+	-	

## 考察：研究課題1～リハーサルの影響～

結果：  
 発話語数 (+) (小) 統語的複雑さ (+) (小) 語彙的複雑さ (-) (中)

先行研究との比較 (表5参照)

- ライティングのリハーサル…流暢さの向上 (伊達, 2007)
  - 学習者の注意…より内容 (content) へ (Skehan, 2001)
- スピーキングのリハーサル…統語的複雑さの向上
  - 仮説検証の機会→中間言語の再構築の機会 (Skehan, 2001)

発話語数の向上…発話の内容を精緻化

語彙的複雑さについて…測定方法の問題

## 考察：研究課題2～練習の影響～

結果：  
 発話語数 (+) (大) 流暢さ (+) (小)  
 統語的複雑さ (+) (中) 語彙的複雑さ (-) (大)

• 全体的にリハーサルよりも高い影響 (表4参照)

- 初級学習者においては、1つのスピーキング活動を1度だけ行うよりも、何度も練習する機会を与えることで、発話の認知的な負担を減らし、より高いレベルの中間言語にアクセスすることが可能。

• 発話語数の向上

## 考察：研究課題2～練習の影響～

先行研究との比較 (表5参照)

- 研究間によりばらつき…① 練習のタイミング、②トピックの繰り返し

## ①練習のタイミング

→ Bygate: 二週間毎、伊達: 1週間毎

## ②トピックの繰り返し

- Bygate (2001) 異なるトピックの練習:
  - Levelt (1989)のスピーキングプロセスを0から処理する必要性
- 本研究: 同じトピックの練習
  - Levelt (1989)のスピーキングプロセスを上塗り
  - 発話の認知処理の負担を軽減→概念形成、形式変換に分配
- 伊達 (2007): 同じトピックの練習: 繰り返しの効果なし
  - 繰り返しのタイミング…6週間後に同じトピックの繰り返し

## 考察：発話の質的な側面の変化

発話の内容 (content) について

学習者

- 発話の内容を精緻化していく学習者 (参加者7)
- 毎回ほぼ同じ内容を発話する学習者 (参加者6)

被験者7⇒1回目(44語)

This is my friend. We are good friends forever. We play basketball for three years in junior high school. Basketball is very interesting. We are basketball player. She is very cute. She is my friend. I like basketball very much. That's all. Thank you.

被験者7⇒4回目(66語)

She is my friend. She name is Chisato. Now she is in Usui Koukou. She is very cute and I love she very much. We play basketball in junior high school. We practice basketball very hard. Basketball is very interesting. We are good friends forever. She can play basketball very well. I can't play basketball very well. Now she is soccer no manager. That's all. Thank you.

### 考察：発話の質的な側面の変化

発話の内容 (content) について

被験者 6 ⇒ 1 回目

This is my brother. He is eleven and he is in elementary school now. He likes baseball very much. His favorite baseball is Giants. He is a member of softball team. I like my brother very much that's all thank you.

被験者 6 ⇒ 5回目

This is my brother. He is eleven. He is in elementary school now. He likes baseball very much. His favorite baseball team is Giants. He is a member of softball team now. I like my brother very much that's all thank you.

- 学習者の活動への態度が影響
- 活動への動機づけ
- 目標の明確化

### 考察：発話の質的な側面の変化

正確さについて：  
量的側面からは効果なし…学習者は誤りに気付いていない？

横山&江草 (2008) に基づき、発話のエラーの数、reformulationの数、誤りが修正された数を分析。

結果：

エラーの数：119、修正を試みた数：7、正しく修正された数：3

→学習者は発話中に、誤りに気付かなかった、または誤りに気付いたとしても直そうとはしなかった

### 結論と教育的示唆

- リハーサル、練習共に学習者の発話の一部を向上させることができた
  - ⇒ リハーサル：発話語数、統語的複雑さ
  - ⇒ 練習：発話語数、流暢さ、統語的複雑さ
- 全体的に、練習のほうが、リハーサルよりも高い効果を示した
  - ⇒ 初級学習者において、1回の授業内でスピーキング活動を繰り返し行うことは学習者の発話の向上に貢献
- 学習者の中には、積極的に活動に取り組み、発話の内容を精緻化していく学習者もいれば、何度練習しても同じような発話をする学習者もいる
  - ⇒ 後者の学習者に対する動機づけ、活動の目標の明確化、教師の支援
- 本研究では、学習者は発話時に誤りに気付かない、または気付いていても直そうとしなかった。
  - 正確さを求めるならば、教師によるフィードバックや自己修正の時間をとる必要がある可能性

ご清聴 ありがとうございます。

ご質問、ご意見、ご批判等よろしくお願い致します。

### 参考文献

- Bygate, M. (2001). Effects of task repetition on the structure and control of oral language. In M. Bygate, P. Skehan, and M. Swain, (eds), *Researching pedagogic tasks: second language learning, teaching and testing* (pp.23-48). Essex: Longman.
- 伊達 正起(2007). 「英語運用に対するリハーサルの有効性に影響を及ぼす要因」 『中部地区英語教育学会紀要』 第37号, 173-180頁.
- Gass, S., Mackey, A., Alvarez-Torres, M. J., and Fernández-García, M. (1999). The effects of task repetition on linguistic output. *Language Learning*, 49, 4, 549-581.
- Kilne, R. B. (2004). *Beyond significance testing: Reforming data analysis methods in behavioral research*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 小泉 利恵&片桐 一彦(2006). 「SELH指定校英語科におけるスピーキング・パフォーマンスの変化」 『第32回全国英語教育学会高知研究大会発表予稿集』 41-44頁.
- Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, Mass: MIT press.
- Lynch, T., & Maclean, T. (2000). Exploring the benefit of task repetition and recycling for classroom language learning. *Language Teaching Research*, 4, 3, 221-250.
- Skehan, P. (1998). *A cognitive approach to language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- 横山 吉樹 & 江草 千春(2008). 「物語タスクにおける自己修正の分析 - 帳尻合わせのメカニズムの考察」 『大学英語教育学会北海道支部紀要』 第5号, 51-72頁.